

沈南蘋の長崎滞在時の絵画制作―「皓月山樓」作品について―

長岡枝里（長崎歴史文化博物館）

沈南蘋（1682-?）は享保16年（1731）12月3日に中国から長崎へ渡来した来舶画人である。南蘋は享保18年9月18日の帰国までの1年9ヵ月あまりを長崎の唐人屋敷で過ごし、唐通事であった熊斐をただひとりの日本人弟子として画技を伝えた。帰国後も中国から作品を日本へ送り続けており、国内外には南蘋の落款を有する作品が数多く存在する。そうした沈南蘋款の作品中に「於皓月山樓」と記される例が複数あることが確認されている。その中に長崎滞在中にあたる年紀の作品があることから、先行研究では「皓月山樓」が長崎にあった建物である可能性が示唆されてきた。本発表では南蘋の「皓月山樓」作品に関係する資料として長崎歴史文化博物館が収蔵する陳朗亭筆《秋景山水図》を取り上げ、沈南蘋の「皓月山樓」作品が長崎で制作されたものである可能性を提示し、更にこれまでに形成されてきた南蘋作品イメージの再考を促すことを目的とする。

《秋景山水図》の作者である陳朗亭（生没年不詳）は、南蘋が来日時に乗船した享保16年三十七番南京船主である。記録によると長崎にはこの一度しか来航しておらず、他の資料にも名前がなく情報に乏しい人物とされてきた。《秋景山水図》は1989年より長崎県が所蔵していたものの、南蘋研究と結びつけられることのないまま現在に至っている。本作には「癸丑仲秋寫于皓月樓」という款記があり、これは享保18年の帰国直前に「皓月山樓」と同じ場所で描かれたものである。本作によって「皓月山樓」が南蘋滞在時の長崎に存在していたことが裏付けられ、「皓月山樓」作品が長崎で制作された可能性は極めて高い。

現在確認している南蘋の「皓月山樓」作品3点を比較すると、落款の文字などから3点とも同一人物によって描かれていると判断できる。発表では、更に主に来日以前の年紀を有する南蘋の代表作例と「皓月山樓」作品の落款を比較検討し、同一人物の筆であるとして矛盾しないことを確認する。

一方で、緻密な筆致や濃彩を特徴とする南蘋の代表作例と「皓月山樓」作品との間では、作風に異なる部分が多い。墨線を主体として淡彩で描かれる「皓月山樓」作品は法量も大型ではなく、細かな毛描等の描きこみも見られない。描かれる内容はつがいの叭叭鳥や鵲に花樹という、いわゆる「南蘋派」の画家達がよく取り上げるモチーフである。こうした特徴を見ると「皓月山樓」作品は南蘋の代表作例よりも、むしろ熊斐ら日本人画家たちの作品との間に多くの関連性を見出すことができる。南蘋の長崎滞在時の作品であるとするれば、当然ながら熊斐は「皓月山樓」作品の画法も学んでいると想定される。「皓月山樓」作品の存在は、沈南蘋作品の従来のイメージの再考を促すだけでなく、熊斐をはじめとする南蘋派、ひいては近世絵画における南蘋の影響を改めて考え直す契機となり得る。